

2. 小溝状遺構と中田畠中遺跡の時代的変遷

(1) 小溝状遺構について

IVa層上面で小溝状遺構が検出されている。小溝状遺構は、20~60cm間隔で同方向に並ぶ上端幅30~70cm、深さ10~20cmの溝幅が不安定な、浅い、底面の凹凸が激しい小溝群である。また、溝方向をほぼ真北方向にとっている。

このような小溝群は、仙台市内では他に、安久東遺跡（仙台市教育委員会：1977）、南小泉遺跡（結城・工藤：1978 工藤：1983）、六反田遺跡（田中：1981）、山口遺跡（田中：1984）、下ノ内遺跡（篠原：1982・1983 渡辺忠彦：1984）、下ノ内浦遺跡（吉岡：1984）、後河原遺跡（佐藤：1984）、伊古田遺跡（金森・渡辺：1985）等で検出されている。これらの内には、同一方向のものだけではなく、直交方向のものが認められる例もある。

これら小溝群は、形状、規模が類似することは基より、以下のような共通点が認められる。

1. 立地が微高地上である。
2. 溝方向が真北方向、あるいはその直交方向であるものが多い。
3. 堆積土中に、検出面下の基本層位をブロック状に含んでいる。

これらより、このような小溝群の性格を畠の畝に関連するものではないかとする見解も出されている（田中：1981 佐藤：1984）。しかしながら、現在のところこれを明確に断定するに至る材量は、仙台市内の各遺跡からは得られていない。今後、良好な遺跡の存在、あるいは関連諸科学による分析により、小溝状遺構の性格は吟味されていくべきであろう。従って、当遺跡検出の小溝状遺構の性格は、畠の可能性もあることを指摘するにとどめたい。

2号溝跡は、小溝状遺構とほぼ直交する遺構である。この溝跡の南側は、小溝状遺構と同一面であるIVa層上面で検出された。しかし、北側では、IIIb層とIVa層の中間層一小溝状遺構堆積積土に類似するが、IVa層ブロックを含まない層。厚さ10cm程度の上面で検出されている。狭い範囲での調査ではあったが、この中間層の上面、あるいは直下のIVa層上面からは、小溝状遺構は検出されなかった。また、2号溝跡と小溝状遺構の重複関係をみると、2号溝跡の方が新しいか、両者同時存在のいずれかが考えられる。

このような2号溝跡と小溝状遺構の遺構配置、検出面、重複関係を総合すると、両者が同時存在であったことが推察される。しかも、1. 小溝状遺構とほぼ直交する。2. 2号溝跡を境にし、小溝状遺構が分布を示さなくなる という遺構配置に、より視点を置くならば、2号溝跡は、小溝状遺構を画する機能を有する遺構として理解される。

同じような小溝状遺構と溝跡との関係は、前述、後河原遺跡でも認められている。しかし、後河原遺跡に関しても、両者の関係の一端を垣間見たにすぎず、溝跡が、小溝状遺構全体の分布域の中で、どのように配置されるかは、なお不明である。今後、小溝状遺構と溝跡の関係の全体像が把握できる資料に期待したい。また、その段階をむかえれば、小溝状遺構の性格解明

もより進展するものと思われる。

(2) 中田畠中遺跡の時代的変遷について

中田畠中遺跡1・2・3次調査結果に基づき、当遺跡の時代的変遷について若干ふれておきたい。1次調査は昭和57年度(青沼・長島:1983)、3次調査は昭和59年度調査(田中:1985)を基にしている。いずれも遺跡範囲の北側部分が調査地点となっており、本文の時代的変遷は北半部分のみという限定条件の下である。便宜上、1次調査区を「西側」、2次調査区を「中央」、3次調査区を「東側」という名称で呼ぶこととする。

古墳時代

現在までの調査では、当遺跡を人間が居住域として利用し始めるのは、この時代になってからである。すでに、前期には「西側」には集落が形成されている。その後、集落が地点を変え継続したか、あるいは廃絶したかは不明であるが、この時代の後期には再び「西側」に集落が形成されている。しかし、全時期を通じて、「中央」・「東側」には居住域はひろがってはいない。この両地区には、この時代に始まったかは明確に断定できないが、生産域一畠一の可能性もある小溝状遺構がひろがっていたことも想定される。

奈良時代

この時代には「中央」・「東側」はもとより、「西側」にも居住域が形成された痕跡は残っていない。遺跡範囲内で居住域が移動したか、この地が当時の居住域としては適さなかったのであろうか。

平安時代

9世紀中葉以降になると再び北半部分に集落が形成され始める。しかも、「西側」・「中央」・「東側」全てに居住域がひろがる。古墳時代に比べると、広範囲にわたって集落一居住域一が拡大したことが穿える。

中世以降

その後も、この地は生活の場として引き継がれる。しかし、前時代に比べ、遺構密度が極端に減少する。明確にこの時代の遺構と認定できるものは、「中央」・「西側」で検出されているが、これらが居住域に伴う遺構であるかについては明らかではない。

以上のように、中田畠中遺跡の北半部分では、古墳時代の前期には集落が形成された。その後の平安時代には、生産域?の部分にまで広範囲に集落が拡大した。だが、中世以降になると集落は衰退し、様相が一変する。しかし、この地がその後の土地利用の方法はともかく、現代まで、何らかの人間の営みの痕跡を受けてきたことは明確である。